

「変人」あるいは〈田舎教師〉の「幸福」

— 正宗白鳥「入江のほとり」と「独学」の時代 —

出 木 良 輔

はじめに

明治三六年に読売新聞社に入社した正宗白鳥は、文芸のみならず教育に関する記事も担当していた。一方で、ほぼ同じ時期の教育雑誌に白鳥の筆によるものと思しき記事がいくつか掲載されてもいることはそれほど知られていない。¹⁾

そのうちのひとつである白鳥生「時事雑感」(『教育学術界』明治三七年一〇月)は、「凡庸生活」すなわち「学校にあつては愉快に勉強し、社会に出ては早く健全の家庭を設け、分相應の暮らしを立て、夫婦仲よく、世間の人にも悪くいはれず、極めて安楽に世を渡ること」を推奨すると共に、「幸福は博士とか大学教授とかよりも小学校の教師が多く占有してゐる」と説くものだ。

実際にはこの時期、待遇の悪化などにより小学校教員の社会的地位が著しく下降していたことは教育史研究において定説となってい

る。²⁾ そうした状況を覆い隠すかのように小学校教員を理想化して語る言説は、教員やその志望者を読者として擁する教育雑誌が得意とするものだった。³⁾ このように、教育言説が抑圧しようとする現実を文学言説はいかに描き出してきたのだろうか。

この記事から時期は下るが、小学校教員の姿を描く正宗白鳥の小説に「入江のほとり」(『太陽』大正四年四月)⁴⁾がある。瀬戸内の寒村に暮らす一家の物語を描く「入江のほとり」の中心人物であり代用教員である辰男という表象、あるいは彼に向けられる兄弟の言葉は、右のように美化された小学校教員イメージを徹底的に相対化する。白鳥の教育言説に對置され得る文学言説としての「入江のほとり」が描き出すのは、学校空間において教員として振る舞う辰男ではなく、家族に「変人」「低能児」と見なされ厄介者扱いされながらも自閉的な英語学習に没頭する彼の姿だ。

「独学」(一)⁵⁾「独稽古」(二)といった言葉で語られる辰男の英語

学習が一家の人々から理解を得られず辛辣な言葉を差し向けられるように、先行論も時に彼の営為を批判的に裁断してきた。外部に開かれることのない辰男の言語表現を早くに問題化した一柳廣孝の以下のような指摘がその一例として挙げられよう。⁶⁾

彼は自らの感性によって植物に〈命名〉し、また単語を構築し、文章化を試みる。しかしここで用いられる彼の言語は、自己閉鎖体系内で循環する言語である。彼の行為は自己目的的であり、完結的ではあるが、何処にも開かれていない。従って彼の営みは、必然的に他者による価値判断を寄せ付けず、他者との精神的、肉体的交流を通して社会内に到達する回路としては、全く機能していない。まして家族というミニマムな共同体内において、彼の行為が自己疎外化を促進しこそすれ、家族に対する交渉の手段になり得ない事は自明である。

物語内で兄弟から「役に立たない」、「愚の極」(六)とまで言われる辰男の「独学」だが、この行為は様々な角度から捉え直されてきてもいる。例えば柳井まどかは「独学」の背後に「辰男の無意識的要請」を読み取り、また田中俊男は「独学」と植物採集に共通する言葉／モノの「収集―蓄積」行為を、「兄弟(妹)たちの内に正しく開花しつつある植民地主義的な収集＝篡奪的欲望」を否定する行為と捉える。⁸⁾

さらに、大正初年の英語学習をめぐる言説の状況を丹念に調査し

た吉田竜也は、辰男を『英語世界』の愚直なまでに忠実な読者であり、換言すれば、当時の英語研究が孕んだ問題を極端な形で体现している人物」として位置づける。すなわち「独学」に励む辰男は、自身が購読する英語雑誌『英語世界』の編集方針、ひいては大正初年に「実用という観点を欠き、形而上学と化した英語研究・教育」のあり方をも体现しているというのだ。

一方でこうした先行論においては辰男の教員としての側面と「独学」の関係性、あるいは「独学」という行為を取り巻く同時代の社会・文化的状況についてはさほど重く見られてこなかった。そこで本稿では、「独学」のあり方を説く明治末期から大正初年の諸言説に目を向けながら、代用教員・辰男の「独学」という表象に内包された批評性を抽出することを試みる。そもそも、一家の人々の辰男批判が一定の根拠を有するものであるように、辰男の「独学」という行為にもそれを支える何らかの論理が存在しているはずだ。このような観点から、人々の言葉を意に介さず「独学」を続ける辰男のあり方を再検討したい。

具体的にはまず、辰男の「独学」を批判・否定する家族の言葉とそれを裏付けるような思潮・言説を確認すると共に、「独学」を支え、煽ってゆくような同時代の言説や文化的状況をも探ってゆく。こうした作業により、栄一や良吉、才次らの言葉が持つ正当性を確認する一方で、その正当性が揺らぎ得るものでもあることを明らかにす

る。その上で辰男の「独学」と同時代の文脈における「独学」の差異についても確認することで、前者の特異性を浮き彫りにしたい。

こうした作業は、「独学」する地方在住の代用教員Ⅱ〈田舎教師〉という表象に新たな意味を見出すことにも繋がるだろう。

一、「世間」の論理

辰男を「変人」と称する家族、とりわけ男性たちは、彼の閉鎖的な英語学習に対して特に冷ややかなまなざしを向ける。例えば「二年間東京の英語学校で正則に仕上げて来た」四男・良吉は「田舎で語学を勉強したつて骨折損だそれよりや早く正教員の試験を受けた方がいゝぜ」という「忠告」を辰男に行い、彼は「父や兄からもそれを最も賢い方法として説勧められ」る。しかし辰男は「馬の耳に風で聞流して、否か応かの返事をさへしな」い^(一)。

代用教員である辰男に対して良吉が受験を勧める「正教員の試験」は、府県単位で実施される小学校教員検定試験を指す。教員の待遇の悪化や就学児童数の増加などといった要因によって明治後期以降生じた恒常的な正教員不足を賄うためになされたのが准教員や代用教員の採用だったが、このことは結果的に教員社会の階層化を進行させたという¹⁰。代用教員は待遇の面においても賃金の面においてもそのような階層の最下層に位置する存在であり、日露戦争期の青年教員像を描く田山花袋「田舎教師」(書き下ろし、左久良書房、

明治四二年一〇月)にも、やはり代用教員である林清三に校長が「検定試験」(小学校教員検定試験)を受けて正規の教員資格を取ることを勧める様子が度々描かれる。

さらに注目すべきは、明治四三年一〇月の文部省通牒が「小学校二於ケル准教員及代用教員ハ本科正教員ノ職務ヲ助クヘキモノニシテ単独ニ児童ノ教育ヲ担任スヘキモノニアラサル」ものとして、正教員に対する代用教員の下位性を明文化していることだ。この通牒は特に代用教員が自由に授業をすることや担任を持つことを規制する内容で、各新聞も「代用教員取締」という一様の見出しでこのことを取り上げた¹¹。つまり「入江のほとり」が発表された大正初年の代用教員が置かれた状況は「田舎教師」の時代¹²以上に過酷だったのだ。「正教員」への階層上昇を辰男に勧める良吉の発言の背景にこのような状況があったと考えるならば、彼の発言は妥当かつ現実的なものとして捉えられよう。

辰男に対し、良吉以上に手厳しい言葉を差し向けるのが長男の栄一である。栄一もまた「小学教員の試験課目を勉強して、早く正教員の資格を取った方がいゝぢやないか」(一六)と良吉の忠告を反復するのだが、彼は辰男の「独学」を「愚の極」として一方的に切り捨てる。良吉が「田舎で語学を勉強したつて骨折損だ」(二〇)と語り、栄一が英語ではなく「和歌とか発句とか田舎にゐてもやれて、下手なら下手なりに人に見せられるやうな者」(一六)を辰男に勧めるよ

うに、二人の主張に共通するのは、辰男の英語学習が地方でなされることを問題化している点だ。

同時代の言説状況、例えば「地方」での「独学」を否定的に語るこの時期の東京遊学案内書の類に目を向けたとき、栄一や良吉の言説の必然性も確認できよう。中村柳葉編『東京遊学成功法』（東盛堂書店、大正二年八月）は、「永く地方に住し、殊に片田舎に生長し、一生を田畝の間に終る者は決して実際の能力ある事なし、何となれば地方に在りて如何によく読書し、如何によく学ぶも、終に何事も為す能はざれば也」と断じ、「地方」や「片田舎」での「独学」の意義そのものを否定することで地方青年を上京へと駆り立てる。これら東京遊学案内書は、明治二〇年代から大正期にわたって数多く発行され、上京と社会的成功を夢見る地方の青年層を惹きつけた書物だ。

また、地方での英語学習については、当時の英語教員たちもその困難さを痛感していたようだ。佐賀県の中学校教員であった平木熊一は、教育雑誌『教育学術界』に寄せた文章の中で、「英語の空氣が欠乏して居る、否、皆無なる事」、具体的には「生徒も教師も外人に接する機会が殆んど無く、何年立つても實際の必要に迫つて英語を語る機会」が「全く無い」ことなどをその理由として挙げ¹³。

これほど具体的なことを良吉や栄一が意識していたなどと言いたいわけではないが、受験を経て地方から上京し都市生活を送った経

験を持つ彼らの言葉が、英語学習をめぐるこうした同時代の言説や思潮の影響下にあったと考えることは不可能ではない。つまり良一や栄一による辰男批判は、こうした社会的な言説によって支えられていると言えるのだ。

では次男の才次はどうか。「わしは旅行しやうとも学問しやうとも思はん」（七）と語り、村での「事業」経営を目論む才次は、村の外部への進出・拡大を志向しない点において栄一や良吉ら学歴保持者・都市生活経験者とは異なる価値観を持つ人物のようにも映る。妻子を持ち、栄一に代わって実質的に家督権を掌握しつつある才次は「東京なり神戸なり、出て行く以上は、その土地々に一生落着くこと」を兄弟（妹）に要求し、勝代にもさらに以下のように忠告する。

「他人のことよりや、勝は自分の身に間違ひのないやうに考へとれ。女子が愚図々々して歳を取つて、英語を喋舌つて学校の先生になつたつて、何が面白いことがあらうぞい」才次は、眼鏡を掛けた妹の平い顔を憐憫な思ひをして見入つた。（四）

「学校の先生」の職に就くことを「面白くないばかりか」間違ひの如く語る才次は、明治期から大正期にかけての典型的な教員イメージを内面化していると言える。とりわけ日露戦争以後から大正期にかけて、待遇の悪化により教員の社会的地位が著しく下降していたことは通説となっている。『読売新聞』の読者投書欄に寄せ

られた以下のような投書も、そのことを如実に物語っている。¹⁵⁾

▲おそらく現代日本の人民の中で最も識見なく、最も意気地なく、最も馬鹿らしきは小学校教員なるべし彼等の語る所は婦女子の品定めならずんば即ち村長郡視学如何にして気に入られ如何にして俸給を増さるべきかの一事なり、嗚呼彼等は遂に社会の蛆虫たるを免れざらん

さらに、女性教員が増加しつつあった明治後半以降も、特に地方において彼女たちは特殊な存在として捉えられていたという。唐沢富太郎は、当時女性教員が纏わされた社会的イメージを以下のように説明する。すなわち「女子師範学校などに入学するような女性は、親の意に叛いて、婚期を逸してもかまわないと考えるような自我を通す女性か、余程の貧乏で、卒業後の収入目当てに入学するものか、或いはまた才能があつても悲しいかな容貌が伴わないために、学問によつて補おうとする女性か、いづれにせよ特殊の女性として見られていた」¹⁶⁾と。

受験勉強に動しむ勝代は女子師範学校でなく「東京の何とかいう英語学校」の志望者だが、近代日本の女子高等教育が小学校教員を多く輩出していたことを踏まえるならば、¹⁷⁾才次の忠告はきわめて現実的であったと言えるだろう。つまり才次もまた、良吉や栄一らと同様に当時の社会的な通念を内面化しているのだ。

これら新聞言説や遊学案内書などといった当時の社会に広く流布

した思潮・言説に支えられているという意味において、栄一や良吉、才次が勝代や辰男に語る言葉は、例えば正論や常識などと呼ばれ得るものに他ならない。辰男が山野で採集した植物に「出鱈目な名前を付けてみた」というエピソードを聞いた際に、「世間で極めた名前を知らずに」行われる植物採集に共感できない栄一の態度（九）を鑑みても良いだろう。こうした意味において、辰男や勝代は兄弟を通して「世間」から批評されていることにもなるのだ。

二、「独学」を煽る言説編制

以上のような家族の忠告を辰男は殆ど意に介さずに「独学」を継続してゆく。先に見た栄一の批判を受けて以降は「今までのやうに傍ら人無きが如き態度ではゐられなく」（一六）なるなど些かの動揺が見られるものの、辰男が彼らの説く正論に耳を傾けようとする姿は描かれない。

ここで浮上するのは、栄一や良吉らが社会的な言説を纏っているように、辰男の「独学」にもそれを支える文脈が存在するのではなく、いかという問いである。つまり先に見たやうなものとは異なり「独学」という行為を肯定するような「世間」の言説を確認し、「独学」という行為そのものを無意味かつ無謀な行為の如く切つて捨てる栄一や良吉の言説の相対化を以下で試みたい。そもそも書物のみを頼りにした「独学」という行為自体、そこに何らかの可能性が見出さ

れるような状況が無くてはなされ難いものだろう。具体的には「独学」を通じて実際に社会的な成功を収めた先人の存在や、「独学」への意欲を喚起するメディア環境などが前提となつてこそ、それはなされ得るものであるはずだ。

例えば、辰男が購読する『英語世界』（博文館、明治四〇年四月〜大正七年一二月）のような雑誌の刊行もそうした環境を構成する要素の一つだろう。これらのように定期的に刊行され、中央で形成される新しい英語思潮を地方にまで伝播させるメディアの存在自体、地方においても学問ができる、あるいは上京のための受験勉強ができる⁽¹⁸⁾といった可能性を読者に見出させ、「独学」を煽る力学を内包していたと言つて良い。このように考えるならば、辰男は閉鎖的な「独学」に没頭する一方で『英語世界』という媒体を通して外的



南日恒太郎氏

【図】南日恒太郎肖像
（『英語世界』創刊号掲載）

な言説にも目を向け、それらを学び取ろうとしているようにも見え

る。
『英語世界』

はさらに、旧制高等学校を始めとする高等教育機関の入学試験合格者、あるいは現職の教員たちを寄稿者として擁し、「独学」に関する

る記事をしれば掲載していた。その中でも実際に「独学」で成功を収めた存在として注目に値するのが、学習院教授・南日恒太郎だ。明治四年生まれの南日は中学校を中退後、明治二九年に文部省の教員検定試験の英語科に「独学」で合格（明治二六年にも国語科に合格している）、東京正則英語学校や第三高等学校を経て学習院で教員を務めた人物である。当時の英語学習者たちに対して南日が有していた影響力は、『英語世界』創刊号が彼の写真銅版（**図**）や連載記事を掲載していたことから窺い知れる。

南日の「独学」に関する記述を『英語世界』から具体的に見てみよう。同誌第六卷第一号（大正元年一月）に掲載された南日恒太郎談「英語研究談」は、南日が「独学」時代に読んだ書籍と雑誌、およびこれらを利用した「独学」の方法を紹介している。明治二〇年代の「独学」経験者である南日も、ここでやはり雑誌類が「自分の英語研究に非常にためになつた」ことを強調する。

この記事の記者は南日を「英文解釈法」や「和文英訳法」等の書を著はして中学生や専門学校入学者の為に絶好の指針を与へた人物として紹介し、また竹内洋は「明治のベストセラー参考書」としてやはり『英文解釈法』と『和文英訳法』を挙げて「南日の参考書は昭和一〇年代までかなり使用されていた」と述べているが、『英語世界』はこのように当時の英語学習者に対し影響力を有していた南日という「独学」者を利用し、いわば「独学」の可能性を暗示し

ていたと言えるだろう。言うなれば南日は「独学」者たちにとっての偶像に他ならなかったのだ。そして『英語世界』を購読する辰男は、南日を始めたとする「独学」成功者の姿をしばしば目にする立場にあった。

無論、『英語世界』のような雑誌の言説のみが「独学」を煽っていたわけではない。明治二〇年頃には既に盛んに出版されていた英語学習・英語研究に関する書籍類もまた、個人での英語学習、「独学」を可能にする上で重要な機能を担っていた。例えば内村鑑三『外国語の研究』（東京独立雑誌社、明治三二年五月）に附録として収録された佐伯好郎「英語自習独学の注意」は、英語の独学を肯定すると共に「方法次第にては甚しき変則を免かるゝ」ことを指摘し、「僅かに外国語研究に関する雑誌、若くは独案内の類に依て、自習独学せんとする」辰男のような学習者へのアドバイスをまとめている。内村鑑三・佐伯好郎が共に白鳥とゆかりの深い人物であることは周知の通りだが、「独習書」などと総称されるこのような書物が数多く生産・消費される時代の中を辰男は生きていたのだ。

さらに注目すべきは、ここで佐伯が「甚しき変則を免るゝ」ための独習の方法と注意をまとめているのに対し、この後には、徒に「正則」にこだわることを否定しむしろ「変則」の機能を説く言説が出現してゆくことだ。生田長江も、『英語独習法』（新潮社、明治四三年一〇月）の第三章「独習者と実用英語」において、「独習」で「正

則の英語」を獲得することの困難さを認めた上で、「変則英語は、唯に無価値でないのみならず、場合に依つては大に役立つことがある」とし、「英語の変則的研究」を肯定する。そしてその際に推奨されるのがやはり「独習」なのだ。

今日の中学校で教へる位の英語なら、独習で十分やれるのみならず、もう少し間違の少い発音や語調も学ばれます。如何に書物で説明することが困難であるとは云へ、今日普通の中学卒業者が、学んで居る位のものならば、余程不完全なる独習書でも、十分間に合ふと思ひます。

「独学」で「正則の英語」が身につかないことを前提としつつも、「変則の英語」を学ぶことの意義、そしてその手段としての「独学」の有効性を説くこの言説は、自身の英語が「正格でないこと」を自覚しつつも「独学」を続けるという辰男のあり方と少なからず重なっていると言える。 「独学」という行為はこうした社会的・文化的環境によって可能となっており、言い換えれば栄一らが内面化する「世間的な言説とは異なった言説によって支えられた行為と見ることが出来るのだ。

だがこうした文脈を基に、辰男の「独学」を「全然無価値」だと否定する栄一の言葉こそが「無価値」なものだなどと言うことは出来ない。やはり問題とすべきは、「別段学校へ入りたいといふことはありません」（一六）と語る辰男が「独学」という行為によって何

を志向しているのか、さらにはこの行為が辰男の意図・志向と必ずしも関係しない形でどのような批評性を孕んでいるのかということである。

既に指摘されているように、先に見てきた同時代言説が煽ろうとする「独学」と辰男のそれとは、「社会的なステータスを獲得しようとする志向性」²⁰を後者が欠いている点において似て非なるものである。辰男の「独学」は、『英語世界』のような同時代のメディアが提示し煽る「独学」に偽装された行為に過ぎないのだと言っても良い。

こうした意味で同時代の「独学」と区別されるべき辰男の「独学」だが、この行為に何らかの批評性が見出されるとすればそれはいかなるものか。このような観点から、辰男の「独学」について以下でさらに検討を加えてゆく。

三、二人の英語学習者

辰男の「独学」の性質を浮き彫りにするために、一家におけるもう一人の英語学習者である次女・勝代の学びのありようについても確認しておきたい。以下の一節がその補助線となるだろう。

が、辞典を片手に勢一杯研究してゐながら、心は動もすると書物から離れて、外の思ひにつかれた。深夜も真昼のやうな東京で、落第した自分がモルヒネか何かの毒薬を飲んで自殺する

悲しい有様を空に描いたり、西洋の婦人と自在に会話を取かはしてゐる得意な有り様に胸を轟かせたりして徒らに時を過した。(三)

ここで勝代が思い浮かべる「落第した自分がモルヒネか何かの毒薬を飲んで自殺する悲しい有様」は、岡山の女学生・松岡千代の服毒自殺事件に影響されて生じたイメージであると推察される。「女の藤村操」(『読売新聞』明治三十九年一月二十九日)などと大々的に報じられた松岡と勝代が共に瀬戸内在住であること、白鳥が松岡についての言及を残していること²¹がその根拠だが、このような勝代の想像力もまた、社会的・「世間」的な言説と彼女との結びつきを示す傍証となろう。

勝代の英語学習が、「西洋の婦人と自在に会話を取かはす」ことが可能な程度のコミュニケーション能力や社会的地位、あるいは学歴の獲得を夢見ながら行われるのもそれゆえだと言える。勝代がどのように社会的に身を立てることを目的として英語学習を行っているとすれば、彼女もやはり同時代のメディア・言説に煽られながら「世間」の論理の中を生きることとなる。勝代の英語学習と辰男の「独学」との差異は、さらに以下の場面からも見て取ることが出来る。

「この書物は読んでしまつたからお前にやらう。荷物は成べく軽くしときたいから」と、出立の前の夜、栄一は弟のテーブ

ルの上に英書を二冊置いて行つた。

辰男は表題と著者の名前とを見詰めたが、読方をも意味をも判じかねた。そして、知らない文字に攻められるのが恐ろしさに、内部をば開けて見ないで、手馴れてゐる自分の書物で蔽ひて机の片隅へ押遣つた。(八)

「知らない文字」に「恐ろしさ」を禁じ得ない辰男の姿を描く一節だ。言うなれば辰男の「独学」とは、このように自らのあり方を相対化し得る他者性を拒否する手段として機能するものでもあるのだ。だからこそ、自身の英語が「正格」か否かは辰男にとって問題にならないのであり、また辰男が「机の側を離れない」自閉的な生活が続けてきたことともそれは関連していよう。

確かなのは、辰男が「独学」を通じて習得する言語が学歴獲得の手段にもなり得なければ他者とのコミュニケーションの手段にもなり得ないということ、そしてそうした意味においてこの行為が「役に立たない」という評価を与えられ得るものであるということだ。ただ、「別段学校へ入りたいといふことはありません」と自ら語り、学歴獲得や階層上昇を目的化することなく「独学」に没頭する「変人」辰男の姿を踏まえたとき、彼と対照的に学校や学歴の価値を自明のものとして疑わない兄弟の価値観もまた浮き彫りとなるだろう。

例えば受験勉強に動しむ勝代は「好きな学問」のできない「可哀さう」で「不都合せな」辰男に憐れみのまなざしを向けているが、「学

問しやうとも思はん」才次も「弟や妹が自分の知らない英語ばかりこそ〜勉強してゐる」ことに苛立つなど、「英語」に象徴される学問や学歴の世界へのコンプレックスを隠しきれていない。こうした一家の学歴主義的傾向を、栄一も「女の子にまで高等な学問をさせるやうになつた」という形で感知している。

一家の兄弟(妹)は、このように学歴や学問、そして学校といった諸々の価値を自明視し疑うことがない。それゆえ時間や金銭を代償として行なわれるにもかかわらず学歴という対価をもたらさない「独学」は、「骨折損」あるいは「役に立たない」対価なき労働として彼らの目に映らざるを得ないのだ。こうした意味において「別段学校へ入りたいといふことはありません」という辰男の「干乾びた切口上」が示しているのは、「独学」を学歴獲得の手段として一元化する近代社会の学歴主義的価値観や、それを内面化した一家の兄弟(妹)と辰男の距離に他ならない。

四、交錯する論理

「世間」の価値観をこのように内面化あるいは体現する栄一や良吉たちは、辰男という個人にとって「独学」がいかなる価値を持つのかという点には目を向けようとせず、「他人に通用」せず「訳に立たない」という理由でそれを否定する。ここで言う「他人」とは自らの生きる「世間」と同義である。栄一は「娯楽にやるのなら何

でもいゝ」と言いながらも、英語ではなく「和歌とか発句」といった「田舎にゐてもやれ」て「下手なら下手なりに人に見せられるやうな者」を辰男に勧める。

こうした兄弟の価値観が学歴社会と呼ばれるような社会形態のパラダイムと連動していることは先に述べた通りだが、特に栄一の「無慈悲」な言葉は、辰男に沈黙を余儀なくさせる。単純に言えば、辰男が固執する「独学」の論理は、実際に英語学習を通して社会的成功を取めた栄一の「世間」の論理に敗北するのである。このことは、辰男の不注意により生じた火事が最後に下された槌のやうだつた（八）と語られるように、自身がこれまで拠り所としていた机や書物が焼け、水浸しになってしまったことで決定的となる。

闇の中に目を閉じてゐても、辰男は絶えず周囲の汚れた焼跡を頭に描き鼻で嗅いでゐた。ぐちゃぐちゃになつてゐる書物や帳面を日に乾かさねばならぬと思つたり、何と何とが焼失せかけたか調べて見なければならぬと思つたりしたが、このまゝ、塵屑にしてしまひたい氣もした。……机上に安んじてゐた彼れの堅固な心が長兄の帰省前後から破れかけてゐたのに、今夜の災難は最後に下された槌のやうだつた。（八）

この「槌」が栄一たちではなく他ならぬ辰男の不注意によって「下され」ることは皮肉という他ない。注目すべきは、栄一による「独学」批判と火事という二度の予期せぬ出来事を経て辰男が変化を余

儀なくされること、具体的には「独学」と距離を置き始めることである。そのような辰男の変化は、例えば栄一の批判以降「作りかけの文章に目を向けるのが厭な氣がした」（六）という一節や、以下の場面などに顕著だろう。

「名が分らんから教へる時にや役に立ちません。私にだけしか誰れにも分らんでせう」辰男は雑草でも木の葉でも手あたり次第に採集して、出鱈目な名前を付けてゐたのだつた。

「それで満足出来るかね。世間で極めた名前を知らずに集めてばかりゐても楽みになるのかい。」

「へえ。あの時分は、楽みにしとつたんでせう。」

今夜は何故だか珍しくテキパキと話すのを聞いてゐると、栄一は弟の辰男を、永年家族が極めてゐるやうな低能児とも変人とも思はれない氣がした。（九）

ここで「あの時分」、すなわち既存の記号体系を無視した命名行為に没頭していた頃の自己を客観視するような態度を辰男が獲得していること、あるいは右の引用部以前に「今まで無用な書物を買込んで月々の俸給を浪費したことが後悔された」（九）という一節があるように、火事の後「独学」のための書物が「無用な書物」として語られてしまつてゐることは見逃せない。

辰男の変化を栄一も感じ取つてゐる（今夜は何故だか珍しくテキパキと話す）が、彼はさらに「永年家族が極めてゐるやうな低

能児とも変人とも思はれない気がした」と、辰男を「変人」視する家族の共通理解をも相対化してゆく。「独学」という自らの拠り所を喪失してゆく辰男の姿を描き出す「入江のひとり」だが、そこからは同時に、辰男とのやり取りを経て自らのあり方を変化させてゆく栄一の姿を見出すことも可能なのだ。

「辰は家で許したら、学校へ入って真剣に英語の稽古をしようといふ気があるのかい」栄一は前とは異つて穩かに話しかけた。(六)暫く黙つて聞いてゐた栄一は、「だけど、辰男が英語を楽みにして、一生通せるのなら、好きなやうにさせたいらい、ぢやないか。傍の者へ迷惑は掛けないのだから」と弁護するやうに云つた。(七)

右の二つの場面に描かれるのは、辰男という個人にとつて「独学」が持つ価値に目を向け始める栄一の姿だ。先に見た通り「独学」を手厳しく批判していた栄一は、ここで辰男に対して「穩やかに話しかけ」たり、彼を「弁護するやう」な態度をも見せてゆく。こうした点を踏まえるならば、このテクストは辰男の価値観に対する栄一の一方的な侵犯のみならず、二人の異なる価値観が交錯してゆくプロセスをも捉えていると言える。同じ家に生まれ、しかしすでに異なる世界の住人となつて久しい二人の価値観が交錯するきっかけとなつたのが栄一の帰省だつたと考えるならば、「入江のひとり」において家という空間はいわば異質な論理の結節点として機能してい

ることとなる。

栄一と辰男のやり取りを描く一連の場面に顕著なように、異なる複数の論理や言説、価値観が衝突あるいは交錯してゆく様相を「入江のひとり」は描き出している。そこにおいて、右のように栄一の変化までもが描かれることはこれまでさほど重く見られてこなかったものの、こうした描写からも辰男の「独学」が単なる「骨折損」と言い切れないものである可能性が見て取れるはずだ。

おわりに

家族内における辰男の位置を最も確かつ端的に示しているのは次の引用部、辰男が起こした火事の後には家族が辰男の処置について話し合う場面に記された父の言葉だろう。

「辰の奴、何か碌でもないことを為出かしやせんかと思ふとつた。(中略) 勝も他所へ行つて辰一人が二階に居ることになると不用心で仕様がないから」と、才次は眉根を顰めた。

「しかし、こんなことは滅多にあるまいが、兎に角今年中には嫁を取らせて、別家させて、自分の始末は自分でやらせることにしたら、些とは普通になるだらう。」(八)

傍点部に記されるように家族から「普通」ならざる存在として位置づけられる辰男だが、学歴の意味が重要性を増していた大正初年において、先に見た通り上位の「学校へ入りたい」という意志を

持たぬまま「独学」に没頭するという点においても、辰男はまさしく「普通」^(あつりま)ならざる存在としてまなざされざるを得なかったと言えるだろう。

明治初期には既に高等教育機関のみならず尋常中学校の入学試験科目として設定されていたという英語は、近代日本において学歴獲得という階層上昇を果たすための言語としての性格を強く有するものであり続けてきた。「受験英語」という言葉は紛れもなくそのことを象徴している。

学歴獲得に象徴される所謂〈立身出世〉は社会的・象徴的な階層移動だけでなく、例えば地方から都市へといった空間的な移動とも切り離せない。それゆえ、近代日本において〈立身出世〉イメージと強固に結びついた言語であったはずの英語が辰男にどのような移動ももたらさず、彼を「机の側」にのみ縛り付けているという点に「入江のほとり」の物語のアイロニーを見出すことは容易だ。結末部において「のび／＼した気持」で「村を離れ」てゆく栄一の姿も、彼とは対照的に未だ「テーブルの前」から離れられずにいる辰男の惨めさを強調する。

こうした階層上昇に繋がりが得ないがゆえに、学歴社会の住人である兄弟から「役に立たない」と評価される「独学」だが、この行為はそれを「役に立たない」と捉える人々の価値基準それ自体を可視化する。家族から「普通」^(あつりま)ならざる存在としてまなざされる辰

男の「独学」は、学歴や〈立身出世〉と必ずしも直結しない学びのあり方を提示しているだけでなく、学びそのものを脱制度化するような可能性を内包した行為でもあり得るはずだ。

例えばI. イリッチも、「教師について稽古」することや「学校へ入」ることが「真剣」な学びの要件として半ば絶対化する栄一らのような価値観に批判を向けている。周知のように、イリッチは学校という制度や学歴による等級付けを自明のものとして受け入れることを通して人々が制度に依存する他律的存在と化してゆくと指摘し、教育を含めた社会全体の「脱学校化」の必要性を説いた⁽²⁵⁾。

イリッチも「独学で学習するのは信用できないことだとみなす」ことを「学校化」された価値観の一例として挙げてはいるものの、だからといってここで辰男の「独学」をイリッチが説く「脱学校」の意識的な実践などと捉えようというわけではない。重要なのは、代用教員とはいえ教育制度の中で学びを提供し、学校や教育、学歴の価値を伝播・体現してゆくような立場にあるはずの辰男が、反「学校志向」(山本哲士)⁽²⁶⁾とも言える立場を結果的に示していることだ。学歴獲得や就職といった目的の欠落した「独学」に没頭する彼は、言うなれば学歴社会から逸脱した教員でもあるのだ。ここにも「変人」辰男の「普通」^(あつりま)ならざるあるようが露呈しているのみならず、その姿は彼を否定する「学校化」された価値観への抵抗ないし「反逆」としても映る。学校空間での辰男の姿を一切映さない「入江のほと

り」だが、彼が（代用）教員として設定されることの意味はこうした点にあらう。

主に中等教育を経て地方での教職（特に小学校教員）に従事する〈田舎教師〉は、学歴の世界からドロップアウトした哀れな落伍者として近代日本の言説空間に頻繁に描き出されてきた。先にも触れた田山花袋「田舎教師」がその典型であることはおそらく言うまでもないが、教育言説がそうしたイメージを覆い隠すように「幸福」を「多く占有してゐる」聖職としての小学校教員像を提示していたことは冒頭で触れた通りだ。「入江のほとり」にそのような教員像が表象されてはいないものの、しかし同時に代用教員・辰男は「独学」という何者にも「役に立たない」孤独な、しかし「幸福」な時間まさに「占有」していたのだと言って良い。

学歴獲得や階層上昇に結びつかず「役に立たない」はずの「独学」は、しかしそれが辰男にとって「幸福」なものであるが故に学歴社会の住人たちの価値観を揺るがし、時に彼らを苛立たせる。この「幸福」の舞台が「焼跡」と化し、辰男も変化を余儀なくされてゆく様を描く「入江のほとり」だが、そこにはささやかな抵抗としての「独学」に耽る「変人」あるいは〈田舎教師〉の姿が表象されていたのだ。

冒頭で触れた白鳥生のものがそうであるように、教育言説は時に「博士とか大学教授」といった高い社会的地位を付与された他の職を貶めながら（特に地方での）「小学校の教師」の職を理想化する

ことで、転職や高等教育機関への進学、さらには地方から都市への移動といった様々な階層上昇への欲望をさえぎる抑圧装置として機能してきた²⁶。してみればこのテクストにおける〈田舎教師〉の表象は、学校や教育をめぐる価値観のみならず、教育の言説空間に働くイデオロギーを様々なレベルで裏切っていることとなる。このような意味において「入江のほとり」は、抑圧装置としての教育言説を相対化し得る文学言説として位置づけられるのである。

*引用は全て初出に拠る。引用に際して旧漢字は現行のものに改め、ルビは適宜省略した。また、引用文中の傍点はすべて私に附した。本稿は、日本文学協会第36回研究発表大会（平成二八年六月二六日、於・岩手県立大学）での口頭発表に基づくものである。発表に際して多くのご教示を賜った方々に記して御礼申し上げる。本稿はJSPS科研費（特別研究員奨励費・課題番号16J00019）による成果の一部である。

【注】

(1) 『教育学術界』（同文館）に掲載された白鳥生・はくてうの記事については、拙稿「教育学術界『教育学術界』の〈文学〉と青年教員―中内蝶・二寒梅をめぐる―」（『国語教育論叢』平成二七年二月）で触れた。また、『教育学界』（金港堂）には「正宗白鳥」名義での翻訳小説「小百合」（明治三七年三月。原作はポーランドの作家であるヘンリク・シェンクェヴィチ）が掲載さ

れている。

- (2) 石戸谷哲夫『日本教員史研究』（野間教育研究所、昭和三十三年二月）などに詳しい。
- (3) 詳細については、拙稿「田舎教師」の欲望をさえぎる—明治四〇年代、教育界のなかの文学—（『日本文学』平成二八年九月）など参照。
- (4) のち、正宗白鳥『入江のほとり』（春陽堂、大正五年六月）に採録、なお本稿での本文引用は全て初出に拠る。
- (5) 引用部に付した漢数字は、「入江のほとり」の章番号を表す。以下同様。
- (6) 一柳廣孝「揺れる〈家〉—入江のほとり—論のための覚え書き」（『名古屋近代文学研究』昭和六二年二月）
- (7) 柳井まどか「入江のほとり」の光景」（『淵叢』平成七年三月）
- (8) 田中俊男「取集という「娯楽」—正宗白鳥「入江のほとり」—」（『日本文学』平成一四年三月）
- (9) 吉田竜也「入江のほとり」の言語論—「英語」が編制する「世界」—（『国文学研究』平成一八年一〇月）
- (10) 陣内靖彦『日本の教員社会—歴史社会学の視野』（東洋館出版社、昭和六三年二月）参照。
- (11) 例えば『東京朝日新聞』、『読売新聞』。共に明治四三年一〇月二七日付。
- (12) 物語内時間である日露戦争期と発表時期の双方を指している。
- (13) 天野郁夫「増補 試験の社会史 近代日本の試験・教育・社会」（平凡社、平成一九年二月）参照。
- (14) 平木熊一「田舎に於ける英語教授上の実際問題」（『教育学術界』大正二年一二月）
- (15) 「ハガキ集」（『読売新聞』明治四五年二月八日付）
- (16) 唐沢富太郎『教師の歴史』（創文社、昭和三〇年四月）
- (17) 木戸若雄『婦人教師の百年』（明治図書出版、昭和四三年三月）など参照。
- (18) 例えば『英語世界』は「英語受験界」と題する受験特集号を頻りに組み（「入江のほとり」発表の大正四年まででも第五卷第四号、第六卷第四号、第七卷第四号、第八卷第四号・第一一號、第九卷第四号。なお、第九卷第四号は「倍大增刊英語受験準備」）、各高等学校や専門学校、あるいは文検といった各種試験の英語の答案、受験者による受験体験記や受験アドバイス掲載している。
- (19) 竹内洋『立志・苦学・出世 受験生の社会史』（講談社、平成二七年九月）
- (20) 注9に同じ。
- (21) 「宗教問題」（『読売新聞』明治三九年五月一・二日）。なお、この記事の存在は木村洋『文学熱の時代 慷慨から煩悶へ』（名古屋大学出版会、平成二七年一月）によって教えられた。
- (22) 石岡学「生きられた「学歴エリート」の世界—学歴社会黎明期における高学歴男性の教育経験—」（小山静子・太田素子編『育つ・学ぶ』の社会史—「自叙伝」から—藤原書店、平成二〇年九月）は、一九〇〇年代から一九二〇年代に、実利的な面でも象徴的な面でも「学歴」の重要性が増加し、「学歴社会」化が進行したことを指摘している。
- (23) 江利川春雄「受験英語と日本人—入試問題と参考書からみる英語学習史—」（研究社、平成一三年三月）
- (24) I. イリッチ『脱学校の社会』（東洋・小澤周二訳、東京創元社、昭和五二年一〇月） Ivan D. Illich, 1970, *The Deschooling Society*, Harper&Row.
- (25) 山本哲士『学校の幻想 教育の幻想』（筑摩書房、平成八年一月）は、イリッチの指摘から「学校志向からの脱出は、学校を非学校化（「脱学校化」と同義）引用者注、するだけではなく、社会をも非学校化することだ」という内容をつかみとらねばなりません」と説く。
- (26) 注3に同じ。

—でき・りょうすけ、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学—